

第51回全日本登山体育大会報告

第51回全日本登山体育大会が福井県ではじめて開催された。期日は平成24年10月27～29日。白山開山の祖は「泰澄大師」泰澄(たいちょう、)は、奈良時代の修剣道の僧。加賀国(当時越前国)白山を開山したと伝えられる。越の大徳と称された。

この白山を開山した泰澄を感じながら、越前の名山、百名山のひとつとして九頭竜湖の北西の独立峰、荒島岳をはじめ取立山、大佛寺山、越知山、野坂岳、岩籠山の福井五岳に全国から集まった220名がそれぞれ分散して上る。この大会の会場は福井市 敦賀市 大野市 勝山市 あわら市、永平寺町、越前町であった。

初めて福井県で開催されること、今回広島からは広島大学山の会から藤川昌寛、田賀雅文、渡辺勝俊3名が参加した。荒島岳は一回目は単独行、二回目は広島大学山の会の先輩・地元の増永迪男さんの案内で、広島大学山の会石橋満雄の三人で登った。増永迪男氏の著書「取立山」を、今回は三人とも水芭蕉で有名な取立山を登った。

「福井の山のみどころ よいところ」講師 増永迪男氏

第五十一回全日本登山体育福井大会:記念講演会があった。その第二部「福井の山の見どころ 良いところ」として講師:増永迪男氏(ますながみちお)1933年福井県生まれ79歳、福井山岳会会長
プロフィール 登山家、山岳エッセイスト 1967年・アフガニスタン・ヤジュン峰登山隊リーダー
1968年・国内、県内の山々登山を通じて、文筆活動に入る。広島大学山の会会員でもあり、私の3年先輩でもある。

主な著書一覧:霧の谷/霧の谷 2/日本海の見える山/取立山/しらやま考/福井の山 150/霧の森/霧の山/踏絵踏まざりし者の裔(こ)我等/風景との出会い/夜明けの霧の山/喜寿になっても山のぼり「春夏秋冬山のぼり」/などがある。

[記念講演会は1時間ばかり福井の山は若狭と越前に大きく分かれ、山々のその特徴、^{おばま}小浜港が古い時代の重要な貿易港、そこからの陸路として都までの道、鯖街道、鮮度を保つための要所、要所までのリレー方式、これは初耳だ。

峠みちの変遷、峠みち脇道の形成、重い荷物を運ぶため丁寧な作りと絶妙な勾配加減、鹿の為、笹が激減、トリカブトの繁茂、まるで自分が歩いている感じになる語り口。全国から集まった中高年、特に女性の固唾をのんでの聴衆雰囲気周囲に感ぜられた。]

NHKラジオ放送 11年の実績

増永迪男氏は11年にわたりNHK ラジオ朝一番5時10分に生放送の全国放送されている実績があり、NHK放送は現在も続いている、情景の分かり易さ、鳥の声、山の草花、風雨の音、色彩を取り入れ臨場感あり、自分があたかも其処にいる感じになる。話の間の取り方、話題の取り方、素晴らしい。郷土の山に対する愛情、私なんかその感性、根気、熱意、エネルギー、にとっても及ばないと肝に銘ずる。

体力が続く限り歩き続ける

10年前に、ネット上、専門誌上で著名な国際温泉評論家山本正隆氏(世界温泉紀行66湯を平成18年上梓、広大山の会会員、増永氏の1年後輩)がヨーロッパ城跡・温泉 2500km旅行に誘ったが、増永氏の答えは「……山に登れる体力が続く限りまだやま歩きを続ける……」だった。

上記増永氏の著作集の中、「福井の山 150」の序に {よく晴れた日曜日に美濃平家(一四五 m)に登った。……越前の山やまが全て見渡せそうな展望だった。……その時のことだった、

山から山へと視線をさまよわせているうちに、「福井の山は何ほどもまだ知ってはいない」という思いが、突然湧き上がってくる。もちろん、今見る山やまの殆どは既に登ってきた。四季にわたって登った山も数多くある。

しかし、日差しを浴びてさまざまな緑に輝いている山の姿を眺めていると、私のこれまでのこの広い山の中での歩みが、山頂を目指す細い線に過ぎなかったことに、改めて気づかされるのだった。……}の記述があった、増永氏の答えはこれがベースになっていることに気付いた。

この記念講演会を拝聴し 増永迪男氏の気持ちの一端を理解できたと確信した。懇親会で福井県山岳連盟の皆様の方々に挨拶した、増永迪男氏が皆さんから慕われ方がやはりすごいと思った。

また以前のことになるが福井県立図書館で「ふくい山の文学」深田久弥 桑原武夫 増永迪男の企画展が‘ 08 - 6 - 17 ~ 7 - 31 開催された 広島からは 藤川昌寛、石橋満雄が ‘ 08 - 7 - 23 ~ 25 福井県立図書館往訪した。

福井ゆかりの文学者 3 名

深田久弥 桑原武夫 増永迪男

この企画主催者の趣旨は次の言葉・・・

「山の文学として、最も知られているものの一つに、深田久弥の「日本百名山」がある。本著は日本中の山々から、山の品格・歴史・個性を基準に深田自身が百座選び、それぞれの山についての随筆をまとめたもので、福井県からは荒島岳が選ばれている。旧制中学時代を福井で過ごした深田は、一生登山に親しみ、山の文学作品を数多く残した。

桑原武夫は評論家・フランス文学者として知られる一方、登山家としても名を馳せた。三高山岳部時代より今西錦司、西堀栄三郎ら、後の山岳会を牽引していく人々とともに登山に打ち込み、54歳の時には京都大学学士山岳会の隊長として、パキスタンのチョゴリザ初登頂にも成功している。

現在、山岳エッセイストとして活躍する増永迪男は、13歳の時に経験した白山登山以来山に親しんでいる。34歳でアフガニスタンのヤジュン峯初登頂に成功してからは、より一層ふるさと福井の山に親しむようになり、福井の山についての文章を数多く発表するなど、戦後の福井の文学界で山の文学を展開し、独自の世界を構築した。

以上、福井にゆかりのある文学者3名によって書かれた山の文学作品をとおして((ふくい山の文学))を見ていきたい。・・・

この3者の中で増永迪男氏は広島大学山岳部では私に入学当初から教え込まれ以来半世紀、現在の信州にある広大山岳部山荘(鹿島クラブ)ライフを通して親交が続いている。

増永迪男氏プロフィールを追加すると

1933年(昭和8年)7月9日、福井市に生まれる。福井県立乾徳高等学校、広島大学工学部を卒業、1946年8月(当時13歳)の白山登山より山に親しみ現在に至る。福井市在住。戦後の福井の文学界にあって、山の文学を展開し、山岳エッセイストとして独自の世界を構築した。1985年福井県文化芸術賞受賞、2000年福井県文化賞受賞。

先般広島野呂山にて日本山岳会広島支部例会山行で山頂を登る、公益法人化したので修道大学山岳部を支援している、その中に中国からの女性留学生2名(一人は雲南省、一人は天津)もいた。

リクエストで一番にこの広島大学山岳部第二部歌を声高らかに歌った。

彼女たちも分かるのであろう ウィンクを送ってきた。

広島大学山岳部第二部歌 増永迪男作

- ・銀座のチムニー背中が滑るよー！！
- ・黒なめらは足が滑るよ！
- ・ドンガメ岩で昼寝をすれば 瀬戸の島々 波は静か！
- ・ここに 挑む我等が 広大アルパイン
- ・クラブのワカメのズボン
- ・オーオーオーオ 我等は日本一の山男
- ・ヒマラヤを目指す！！！！

注釈

- ・黒なめら = 大きな壁のような一枚岩で雨水が垂直に流れ、いつもは黒光りしている岩。
- ・ワカメのズボン = 岸壁を登ると岩角でズボンが擦り切れる つぎはぎを縫い付けたズボンがワカメのズボンに見える。
- ・チムニー = 煙突 chimney のこと = 岸壁の縦の裂け目で、人が入れる位の幅のもの。これをのぼるには、体を内壁につっぱり、ひざと背中や全身の摩擦を利用して尺取虫のようにずり上がる。

日本山岳会広島支部例会山行でテント泊例会ではいつもこの広島大学山岳部第二部歌がリクエストされるのでよく歌う。

広島大学山岳部第二部歌を作ったのが増永迪男氏である。
よき先輩を持ったこと誇りにしている。

了